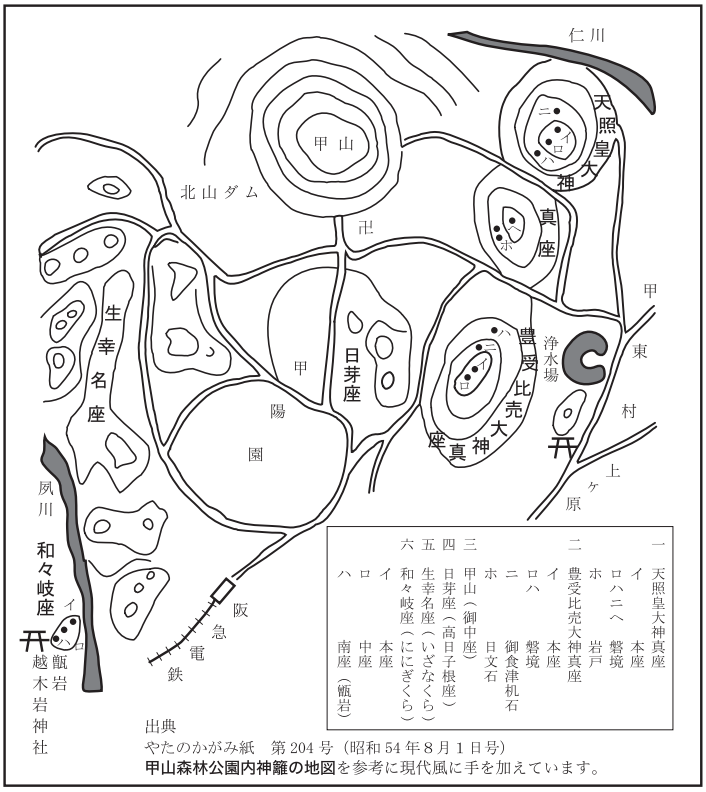
「日本文化の源泉としての磐座・磐境（七）」

甲山森林公園の磐座

ＮＰＯ古代遺跡研究所 所長　中島 和子

生幸名座

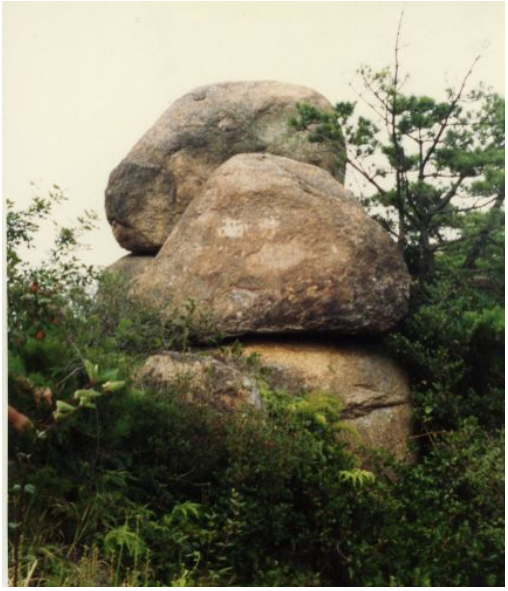
六甲山の東・西宮市の甲山の東麓に広がる森林公園には、伊勢の皇大神宮の内宮と同じ天照皇大神を祀った磐座を中心とする祭場が南北に二丘、さらにその南には外宮と同じ豊受大神を祀った祭場が東西に二丘、さらにその西の日芽座（ひめくら）には須佐之男（すさのお）命（大国主）時代の三神を象徴する三磐座が配置されている。注① 木造の神社建築か巨石による磐座かの違いはあるが、太陽崇拝時代の祭祀様式としては共通のものがある。 前稿に紹介した太田三二氏の日記には、次の探査地である生幸名座（いざなくら）の手前で終わっているため、本稿の依拠する先人の研究は無い。 しかしその地理的範囲は、北山ダムから越木岩神社にいたる広い範囲に及び、目に映る岩も多種多様で思わず魅き込まれる神秘の地である。歴史の流れから見ても、次第に地球や人間の歴史的誕生に近づきつつあるかに思えて興味は尽きない。 そこで分からぬまま、手探り目探りの探査が始まった。まず生幸名座（いざなくら）の東北に位置する北山ダムの南辺の道から入って生幸名座（いざなくら）の中央を真っ直ぐ南へ下がると、西に位置する柏堂（かやんどう）のバス停を東に向かって進む山道と交わる。その交差点は丘の上にあり少し広くて累々たる岩に囲まれている。見晴らしが良いので、ここを拠点として周囲を観察することにした。まず目についたのは柏堂（かやんどう）から入ると左に見える大きな丸い美しい岩だった。それは満月のように輝くばかりに見えたので、《月の岩》と名づけた。（第一図）



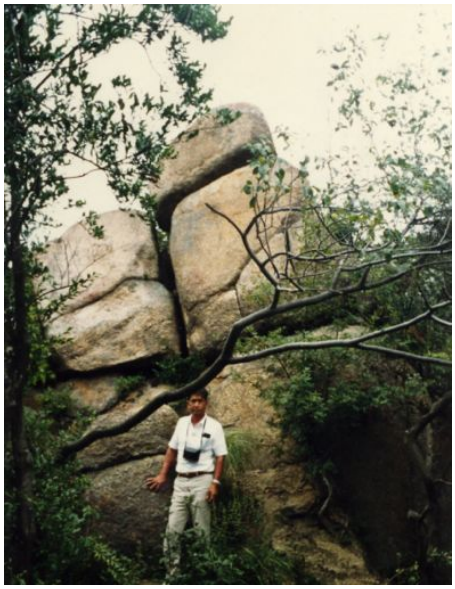
出典
やたのかがみ紙　第204号（昭和54年8月1日号）
甲山森林公園内神籬の地図を参考に現代風に手を加えています。

甲山周辺磐座群の全景

第一図　月の岩

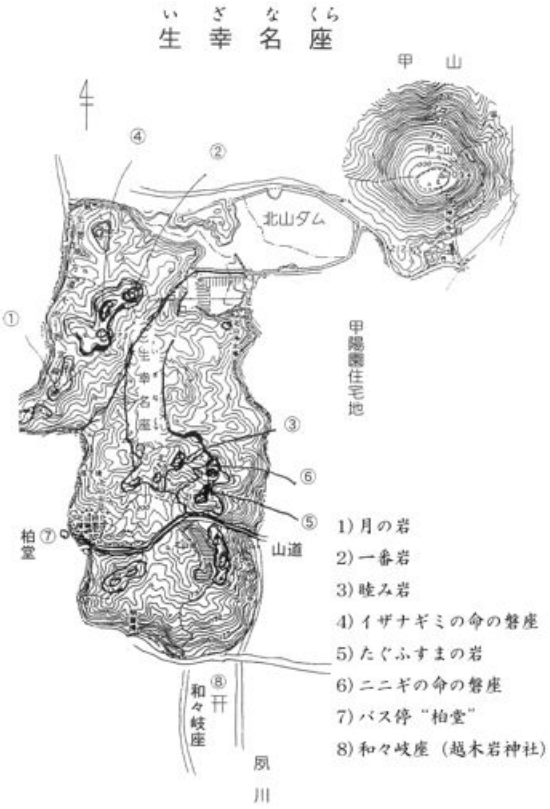


第二図　一番岩



第四図　イザナギミの命の磐座

第三図　睦み岩



次に拠点から見渡すと、北へ伸びる真っ直ぐな道、これは北山ダムから入って南下した道でもあるが、この祭場の背骨をなしていて参道のようであるが、その眞北に一段と高く積まれた岩組みが一つ堂々と聳えている。これは一番北で一番高いので《一番岩》と名づけた。（第二図）　この拠点は高台になっていてちょっとした広場のようだが、岩また岩が累々と立ち並んで砦のような感さえある。なかでも目につくのは、ほぼ中央辺りのところに抜きん出て美しい

岩組みがある。五つの岩が左右対称に組まれていて、お互いに睦（むつ）み合っているようなので《睦（むつ）み岩》と名づけた。（第三図）　少し前にこの辺一帯に火事があったとかで、この時期には「拠点」から見渡す限り、岩また岩で樹木が少なく、岩の配置を見渡すには又とない好機だった。しかし現在は木が伸びて一帯は樹林と化し岩は殆ど木の陰に隠れてしまった。

　生幸名座（いざなくら）の探査を始めたのは、私一人ではなかった。私の父や母もそれぞれに時間を見つけて通い、磐や岩の間を歩き回っては首をひねっていた。

　磐座調査や古事記研究において、私は両親よりはるかに後進で、受け身だった。当時私は東京で桜美林大学の教職に在ったので、春休みや夏休みに帰郷すると、待ち構えていた両親に磐座めぐりに連れ出され、古事記研究の熱風を浴びせられた。

　荒深先生の後継者日立道根彦先生が毎月西下され、私宅で荒深古事記を講義されていたのでお会いする事も多かった。磐座巡りは親孝行のつもりで付いて廻ったが、今から思えば、またとない幸運な時期だった。

　ある時「生幸基幹命（いざなぎみのみこと）の磐座が見つかったよ」と母が大声挙げて戻ってきた。どれどれと父と三人で現地へ行くと、第四図の示すように高く堂々と組み上げられた岩組みが二柱寄り添うように立っている。そのようにも思える。しかし磐座の声を聞くような特殊な霊感を持ち合わせないわれわれ三人には、確かにそうだという確認の根拠が必要だった。ただ母には、前に《風神の岩》を見つけ出した実績があった。それは、芦屋市奥池の《剣岩》について、これはオリオン座が刻まれており武御雷之神（たけみかづちのかみ）（雷神）が降臨される磐座だと日立先生から教えられた母は、近くに経津主（ふつぬし）之神《風の神》の磐座もあるはずと確信し捜し回った結果、ついに道を隔てた五六五六岳（ごろごろたけ）の近くに磐境に囲まれた磐座を見つけた。母の確信はこの二柱の神を一対の祓いの神とする古事記の思想に依拠していた。

　西洋の天文学では、オリオン座は、天下無敵の勇者を示す。しかし彼は蠍（さそり）に殺されるので、東からさそり座が昇るころには、西の空へ沈んでしまうと言われている。ところが古事記のなかではたとえば天ツ神の命を受けたこの二柱の神は、力を合わせて天若日子を惑わした邪女（さぐめ）を追い払う。雷のすさまじい稲光と轟音、そして猛烈な暴風は邪女（さぐめ）を海の彼方へ吹き飛ばしてしまったと言われている。

　神社建築時代になってもこの二柱の神の御社は対（つい）として並び立つ。茨城県の鹿島・香取神宮がその良い例である。深く厳しい原始林を背景にして建つ鹿島神宮は建御雷之神を祀り、北向きだが中の磐座は東（太平洋）向きと聞いている。一駅離れた香取神社は、参道から御社全体が桜の木に覆われていて、春にはそよ風に乗って桜の花吹雪が御社を渦巻く。雷と風、それぞれの個性が見事に生かされた御社である。

　ところで、磐座探査で行きづまった時は古典に戻らなくてはならないというのが、これまでの私の経験だった。早速帰宅して古事記を繙（ひも）といた。黄泉（よみ）から戻られた生幸名基（いざなぎ）の命が筑紫の日向の立花で身添気祓いなしませるとき成りませる神々の中の三貴神の誕生について古事記に左の記述がある。

「ここに左の御目（みめ）を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、天照大御神（あまてらすおほみかみ）。次に右の御目（みめ）を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、月読命（つきよみのみこと）。次に御鼻を洗いたまふ時に、成れる神の名は、建速須佐之男（たけはやすさのお）命」注②

早速、森林公園に戻り生幸基幹命（いざなぎみのみこと）の磐座の前に立つ。その左の御目（みめ）の先を見通すと、何と、そこには《一番岩》が聳え立っているではないか。《一番岩》はこの神籬の中心を南北に走る参道の正面真北に聳える最も高い岩組みである。古事記によると、これが天照大神の磐座である。また生幸基幹命（いざなぎみのみこと）の磐座の右の御目（みめ）の先には、何とあの美しい《月の岩》がある。古事記によると、これは月読之命の磐座である。御鼻の前には須佐之男（すさのお）の命の磐座があるはずだが、ここは樹木が繁茂して全姿をみることはできないが、木々の間から垣間見る頂上の岩から判断して相当大きな磐座と思われる。

かくして、三貴神の磐座の存在とその位置関係から母が見つけた生幸基幹命（いざなぎみのみこと）の磐座は正しいことが分かったのである。

次に、参道を南に下がると先述の通り柏堂（かやんどう）のバス停から植物園を抜けて東へのびる山道との交差点、私の呼ぶ「拠点」へ出る。拠点は四米ほどの高さにあり、上は十メートル四方位で砦のように巨石が累々と連なっている。その中央辺りに美しい岩組みの《睦（むつ）み岩》が存在する。《一番岩》から南下するにしたがって、次第に地球と人間の誕生へ近づくのではないか、と胸をときめかしつつ、なお良く観察すると、拠点の南東部に一際大きな楕円形の岩がある。登山クラブの人達は、これをボールドヘッド（禿げ頭）と名付けて岩をよじ登る練習をするために四角い金具を頂上へ向けて幾つも打ち込んでいる。その岩の横に長い流線形の岩が横たわっている。中央が長く掘られたようにへっこんでいる。ドルメンや磐舟ではない。古事記の中に、流線形をなし柔らかくなだらかで何かを包むようなものが出てこないだろうか。

ふと思い出すのが《たぐふすま》であった。古事記によると天照大神の長皇子・天忍穂耳命（あめのをしほみみのみこと）が、今や生まれ出づる人間の尊きみ魂の祖として地上に降臨せんとなされし時、妃・万幡豊秋津靈芽命（よろづはたとよあきつひめ）に皇子（みこ）が誕生。代りにこの皇子を降臨させようということになり、皇子の御床を《たぐふすま》に包み天之兒弥根日子（あめのこやねひこ）の命に背負わせて天降（あも）りましたという。注③

その《たぐふすま》ではないだろうか。そうとすれば近くに天孫和々岐（ににぎ）命の磐座があるはず。《たぐふすま》の東には例のボールドヘッドと呼ばれる巨石があった。この磐は、ある研究者が太陽石と呼んだほど大きく豊かで貫禄に富んでいる。注④ しかしどうみても後ろ姿のように思える。この磐の向こうの面はどうなっているのだろうか。しかし誰もそれを見ない。なぜなら、この磐は絶壁の上に立っていて危険を侵さずに見ることは難しいからだ。

私は必死になって木の枝を押し分けてやっとその磐の横顔をみることができた。何と、その磐には目があり、鼻があり、しかも東南の方向へ向かって大きな口を開けて雄叫びを挙げている尊い神のお顔だった。これが和々岐の命の磐座なのだ。

「是に天忍穂耳命（あめのをしほみみのみこと）天降（あも）りまさん装ひを為しませるひまに、皇妃高基神（みめたかきのかみ）の女万幡豊明津霊芽命（むすめよろづはたとよあきつひめのみこと）皇子生みませり。天照皇大御神、高基産霊神（たかきむすひのかみ）共に甚と愛ぐしとして育てませり。故に此皇子を国邇岐志邇々気命（くににぎしににげのみこと）として、其御父命に代わりて天降りますべく神議りまして真床（まとこ）を栲衾（たくふすま）覆ひ、天之児弥根幸霊凝（あめのこやねさちひこ）命に負はし、太

魂命（ふとたまのみこと）霊璽を抱きて天降しませり。」注⑤

ところで、ここまで来れば、私が「拠点」と呼ぶ場所が何を意味するかは明らかとなろう。和々岐命の降臨の地に違いない。それは広く「大八州」なのか、それとも狭く「筑紫」だけなのか。累々と立ち並ぶ磐岩を詳細に調べる時間が私にはなかった。ただ九州が見事に表現されていることに感激した。あの「睦（むつ）み岩」だ。（第三図）

第五図　たぐふすまの岩

古事記によれば、生幸名基（いざなぎ）・生幸名幹（いざなみ）の命が天より戻られて、天授の身止（みと）の方法によって再び島生みのみ業が進められる。最初に淡路島を生み給い、その響きは西へ及んで四国を生み給い、更なる西進の響きによって九州を生み給う。九州の生成について古事記は次のように述べている。

「次に筑紫（つくし）の島を生みき。この島もまた、身一つにして面四つあり。面毎に名あり。故（かれ）、筑紫（つくし）の國は白日別（しらひわけ）と謂ひ、豊（とよ）國は豊日別（とよひわけ）と謂ひ、肥（ひ）の國は建日向日豊久士比泥別（たけひむかひとよくじひねわけ）と謂ひ、熊曾（くまそ）の國は建日別（たけひわけ）と謂ふ。次に伊伎（いき）の島を生みき。亦の名は天比登都柱（あめひとつばしら）と謂ふ。次に津（つ）島を生みき。亦の名は天之狭手依比賣（あめのさでよりひめ）と謂ふ。」注⑥

ここでは九州は面四つとなっているが、「睦（むつ）み岩」はどう見ても五つの岩から構築されているように見える。他の古典を調べて見ると、上記（うえつふみ）には次の記述がある。

「上記（うえつふみ）には面五つあり、面毎に名あり、故（かれ）筑紫を白日別と謂ひ、豊を豊日別（とよひわけ）と謂ひ、肥を建日別（たけひわけ）と謂ひ、隈岨（くまそ）を速日別（はやひわけ）と謂ひ、日向を日豊奇比根別（ひとよくしひねわけ）と謂ふとあります。」注⑦

ここでは、九州は面五つとなっている。

では、和々岐（ににぎ）命が着地された筑紫の日向の《くしふるみたけ》は何処にあるのだろう。《くしふる》は色々な漢字が当てはめられている。久士布流多気、または奇触峰または櫶触峰等。しかし荒深式に漢字を排除して元の日本語に戻して読むと、《くし》は《奇》すなわち不可知に神秘または稀有に尊い。《ふる》は《古い》つまり、《稀有に尊く最古の高山》ということになる。そこで「島生み」の記述を読み直すと、島の爆発力が西へ響くのは、地球が東へ向って回転しているからで、最初の響きは最古の地層と成って、四国を貫き九州の中部を斜めに横断している古生層で、九州山地と呼ばれている。その最も古い九州山地の主峰といわれる高い山（高千穂）は国見岳で、地元では大国見（おおぐるみ）岳・小国見（こぐるみ）岳と呼ばわれた二上山をなしている。熊本・宮崎の両県の県境にあり、その頂上はなだらかな円頂峰で、その上に築かれた高さ七米の神籬（ひもろぎ）の上に山岳型の磐座が二つ東西に相対峙している尊い斎場である。高千穂とは固有名詞ではなく、高い地穂すなわち高い山のことで、筑紫の日向と限定された地域の高千穂といえば、国見岳でもある。この山は海抜一、七三九米で九州では三番目に高い山で、まことに稀有に尊く古い《くしふ

る》御岳（みたけ）である。実は「睦（むつ）み岩」の前に重なるように丸いきれいな岩が配置されている。これが《くしふるみたけ》ではないだろうか。

付　記

以上は生幸名座（いざなくら）の「拠点」から北の部分、すなわち上半分の探査にすぎない。拠点から南の下半分にも様々な磐座や岩組みがあってその解明が急がれるが、いまだ手付かずのままである。誰か良く探査されんことを切望する。次稿は、次なる和々岐座（ににぎくら・こしき岩真座）について述べ、次いで甲山と全体のまとめ、最後に「磐座の破壊と修復・保存」について私見を述べたいと思う。

この論文は兵庫県神社庁発行の季刊誌「兵庫神祇」第574号より抜粋

（注）

（1）阿雷清基高日子根之神、鳥成身之神、言代産霊之神の三磐座

（2）出典　倉野憲司校注「古事記」岩波書店

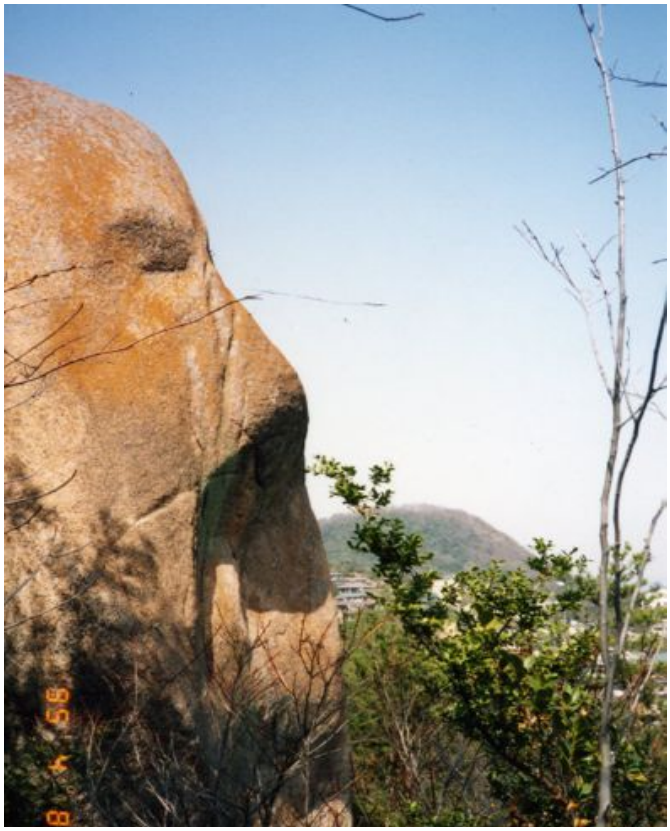
（3）出典　荒深道斉筆録「忍日伝天孫記」弘報社

（4）大槻正温・柳本翠耕ら「北山に古代の天文台」毎日新聞（一九七八年九月十二日）

（5）（6）出典　倉野憲司校注「古事記」岩波書店

（7）出典　荒深道斉著、日立道根彦編集「宇宙時代の科学的古事記正解」道ひらき東京出版部発行

（8）兵庫県神社庁季刊誌「兵庫神祇」第570号の国見岳に関する拙稿を参照されたい。



第六図　ニニギの命の磐座